

# 人が集まる理由は、彼女の生き方にあった 出会いを重ねて生まれた、赤石商店

長野県伊那市の住宅街に静かに佇む『赤石商店』。

一度訪れた人なら、あの木々に囲まれた小さな看板や、扉を開けた先に広がる開放的な空間を思い浮かべるかもしれません。

宿であり、食堂であり、ギャラリーであり、サウナでもある。そして時には映画館にもなる、導かれるように人が集まる場所です。

私自身、この場所を訪れるたびに、人と人との距離を自然と近づける赤石商店らしい空気を感じてきました。けれど、この場所がどのように生まれ、なぜこれほど多くの人を惹きつけるのか。その背景を改めて知る機会は意外と少ないのかもしれません。



今回は、赤石商店のオーナーである埋橋<sup>うずはし</sup>幸希<sup>さき</sup>さん（箕輪町在住）にお話を伺いながら、この場所の原点をたどってみました。そこには、「音楽のある場所から繋がった人との出会い」を大切にしてきた埋橋さん自身の歩みがありました。

## 1. 経歴

### 大規模老舗ホテルで学んだ「接客」

社会人としてのスタートは、東京・赤坂の老舗ホテルの宴会部でした。そこは、最大 3,000 人規模のパーティーを支える現場。アルバイトは多いときには 50 人以上いました。

時には皇族を迎えるような場もあるような、非日常の連続だったのです。

「ホテルの接客って、会話じゃないんです。お客様にストレスがかからない“動線”をつくることなんです。」

特殊な接客の神髄を徹底的に叩き込まれ、それ故にストレスが重くのしかかる毎日。  
専門学校で取得した秘書検定や販売士検定、簿記や医療事務といったたくさんの資格以上に、この現場5年半での接客経験が今につながっています。

## 「音楽のある空間」にいるということ

ハードな毎日とともに乗り越える同世代の仲間たちと、「ライブに行こう!」という軽やかなノリで集まり、音楽のある空間で一緒にお酒を飲み、そんな生活を彩る暮らしにどんどんのめりこんでいきました。

眠らない町東京での生活は、時間の概念がないのですね。

そこにあったのは、肩書きも背景も関係ない“ボーダーレスな空間”でした。

渋谷の「7thフロア」下北沢の「440」などのライブハウスを転々とし、気が付けば月に22日通うこともありました。

音楽のジャンルは問わず「自分の感覚に触れる人」とともに時を過ごし、「箱」から「箱」へとさまよい続けました。

## 2.宿を作ろう思ったきっかけ

### 「この人たちが泊まれる場所をつくりたい」

時が経ち、やがて東京を離れる選択が見えてきたとき、ひとつの想いが浮かんだのです。「この人たちと、また集まれる場所を長野につくりたい」それが、“宿”という形の原点でした。

元々、大きなザルに自分の興味のあることをたくさん入れて、時間をかけてゆっくりとゆすって行けば、残ったものはきっと強いんだろうなという思いを持っていました。

とにかく誘われたことにはまず、乗ってみる、繋がってみる、そして失敗してやることにしています。

私の大きなザルは、いつでもたくさん乗せられる状態になっています。

そんな想いを抱きつつ「もう充分」と、5年半勤務したホテル退職後は全く違う分野の営業職へと舵をきりました。



不思議なことに、ホテルの退職後に就職することは、まだ何もない「次」の自分のためのツナギという感覚が常にありました。なのでハローワークでは「いちばん自分の時間が作れそうな会社」を選びました。希望どおりの再就職で得た自分時間の多くはもちろん、ライブハウスに費やしました。

そうしているうちに、行きつけのお店のオーナーに誘われ、東京・吉祥寺のギャラリー兼食堂「キチム」にも関わるようになったのです。



ここで「接客」って、こんなにも種類があるんだということに気づきました。ここでの経験で、私は”食堂の接客”が好きなんだ、ということを実感しました。

東京へ来てから10年が経ち、やっと自分が本当に「好きなこと」が見つかったのです。

18歳で自宅から出て独り立ちするよう育てられ、自ら挑戦する気持ちを奮い立たせてくれた親には感謝しかありません。

## 「ここで生活しながら、何かできないかな」

10年以上空き家だった祖母の生家は、私が引き継ぐことになりました。

最初は、「建物かあ・・・」と、自分の中での、この建物の価値はほとんどゼロだったところが、新たな「人が集まれる場所」を作ると決心したときから、この建物は輝き始めたのです。そして、東京で知り合った夫に伝えると「俺もそれやりたい」という言葉。この人ならきっと一緒にやってくれと信じ、その後、私の人生のパートナーとなりました。

まず、東京にいる間に夫はお金を貯め、私は宿造りに必要な技術やノウハウを持った人との繋がりを作ることで役割を分担、長野へのUターンを二人で着々と準備していったのでした。



### 3. 起業の覚悟について

「つながり」「暮らし」「宿」



赤石ギャラリー

バラバラだったピースが埋まっていく中で、自然と導かれた答えが「宿」でした。

第1子がおなかに居た頃、学んでいた創業スクールでエントリーした「全国創業スクール選手権」で、スクールの受講者 3050 人中 3 人が受賞。私はそのうちの一人に選ばれ、中小企業庁長官賞を受賞しました。

細部まで練りに練ったビジネスプランは、より細かく自分のスケジュールや目的を書き出すことで明確化され、やるべきことがわかります。それに、これは単なる事業計画ではなく、「こんな場所があったらいい」という人と地域の未来をつなぐ構想でもありました。

宿を始めてすぐに、現在は3人となった子どもを育てながら、宿を軸に運営しています。本気で突き進んでいる人たちがとても眩しいけれど、子育て中の今の私は敢えて一歩引いたところにいます。

主導は夫で、私はあくまでも“二番手”という立場を選んでいきます。

二番手の役割は、全体を見渡し、漏れがないように支えることだと考えています。

役割を固定してしまうと、“誰かのせい”にしてしまうからその時々変わっていけばいいと思っています。

歩み始めた赤石商店を、裏から支える自分につけた肩書は「プロのニート」。

自分で自分に役職をつけることで、スッと前向きになることができました。

「宿を優先しちゃいけない。子どものせいにもしたくない。なら、存分にニートしてやるぞ!」と。

今は、あえて何も「決めすぎない」生き方を選んでいきます。

赤石商店の軸はあくまで「宿」です。

その他、サウナやイベント、ギャラリー運営があります。

音楽イベントも開催していますが、他を求めすぎると趣旨がずれてしまうため、そのバランスの難しさも感じています。私にとって人とのつながりは特別なものなのです。

だからこそ、この場所もまた、誰かにとっての“お守り”のような存在でありたいと考えています。

## 幸希さんのあゆみ

### 18歳●高校を卒業

#### 進学のため、東京へ！

ここで多くの資格を取得。のちの人生を決定する重要な時間となる。

### 20歳●就職 東京の老舗ホテル

学校で取得した資格を活かし、ハードながらも仕事が終わった後は、音楽のあるところに通いつめ充実した日々を過ごす。

### 29歳●結婚

かけがえのないパートナーと出会う♡

### 30歳●Uターン 箕輪町民となる

東京の友人たちが泊まれる宿を作ろうと決意。

### 31歳●中小企業長官賞を受賞

経営を学ぶため受講していた創業スクール。そこで応募したビジネスプランコンテストで、全国3050点の応募の中から、優秀プラン3点に選ばれる。

### 31歳●第1子出産

### 33歳●第2子出産

### 35歳●第3子出産

## 年月

2002年4月

2004年4月

2013年

2014年5月

2016年3月

2016年4月

2016年5月

2018年4月

2018年5月

2018年8月

2020年12月

2021年12月

2022年12月

2026年6月

## 赤石商店のあゆみ

### ●赤石商店、開店！（宿＆食堂）

### ●赤石シネマオープン！

主に、大手では上映されない自主製作の映画を上映。上質な作品ばかりと評価は高い。

### ●赤石ギャラリーオープン！

第1回「とわテザイン展」

### 36歳●赤石サウナオープン！

ボイラー室を利用した薪サウナ

### 37歳●シェアキッチンオープン！

キシロ、イチエイ、カキノ、ロクサン etc

### 40歳●ツリーハウス完成！

ネバーランド！！

## まとめ

これからも、「このままでいい」と言う埋橋さん。

将来の明確なビジョンはあえて持たず「今はこの生活を楽しみたい。その時々に応じて臨機応変に変えていけば今は、あえて何も「決めすぎない」生き方を選んでいきます。



宿、食堂、映画館、ギャラリー、サウナ、、、。  
一見バラバラに見える要素は、すべて「人が集まる理由」を作るためにあります。

東京での経験は、無駄なことは何ひとつない、かけがえのない時間でした。「接客」にも様々な視点からの色々なカタチがあることを自分で実感し、自分が本当に好きなこと掴み取ったこと、そこから始まる人との出会い、その全てが「今」に繋がり生きています。

大きな箕（み）  
にたくさんの可能性  
を乗せ、静かに揺  
すり続けて中に残っ

たものなのです。

赤石商店は、何かを強く主張する場所ではありません。

誘われたことに乗ってみたり繋がってみたりというだけでなく、「失敗してみる」ということもセットであることが埋橋さんの熱い思いなのだと感じました。

ここで過ごした時間や出会った人との縁が、次の挑戦や新たな暮らしにつながっていきました。赤石商店は「人が集まり、何かが生まれる場」なのです。

取材当初、まだ建設中で模型だけだったツリーハウスもこのたび完成。伊那谷の青い空に向かって真っすぐに聳え立つ檜の太木に掛けられた階段を上っていくと、そこには、柔らかな風の吹き渡る、なんとも居心地のいい展望テラスが出現しました。これから、このツリーハウスは赤石商店の新しいシンボルとして、ここで紡がれる歴史を見守ってくれることでしょう。



ここに訪れた人は、無理なく力を抜き、素の自分に戻っていきます。



赤石シネマ 出入口

そして、その何事にも縛られない心地よさの中に身を置き、「一緒にやろうよ」と全身で表現している埋橋さんの飾らない在り方が人を惹きつけ、またここへと帰ってきたくなる理由になっているのかも知れません。

取 材：平賀裕子、千田るみ子  
構成・執筆：千田るみ子  
ご協力：埋橋幸希さん



埋橋幸希さん  
ツリーハウスのうえで